

皆さん、こんにちは。プロホロワ・マリアと申します。今日はこの言葉についてお話をさせていただきます：

鈴と、小鳥と、それから私、
みんなちがって、みんないい。

皆さんがご存じだと思いますが、これは金子みすずによって書かれた詩の一部です。私がこの詩に初めて会ったのは、大学一年生のころです。日本語の授業で先生が紹介してくれました。しかし、私にとってはこの詩は言葉の勉強になったというよりも心に響きました。

子供のころ、私はみんなに褒められるような、良い子になりたかったのです。そのために、いたづらをしない、良い点数だけを取るなど、一生懸命頑張っていました。その努力をあまりしない子を見て、なんで良い子になろうとしないのかなと見下していました。しかし、実は他の子たちも私に負けないくらい頑張っていたのです。

大学に入って、私は本当にびっくりしました。その「悪い子たち」は私より輝いていました。学校の授業をさぼっていた間に人生経験を積んできた学生は、余裕で世界事情を話し合っていました。人間関係を優先してきた学生は、モスクワの日本人とすぐ仲良くなれたから宿題が中途半端でも日本語がどんどん上手になっていきました。

この新しい世界の中で、私は迷子になったような気持ちでした。誰が良い子なのか誰が悪い子なのか全く分からなくなりました。結局、周りのみんなが良い子に見えて、詰まらない私だけには何の魅力もないという感じがして、とても苦しかったです。

何がいけなかったのかを教えてくれたのは、金子みすずのこの詩です。私の性格がいけなかった訳ではありません。「良い子」と「悪い子」という区別が元々間違っていました。本当は、鈴と小鳥と人間のように、みんな違ってみんないいです。それぞれの個性を持って生まれて、それぞれの経験を積んで、それぞれのやり方で世界を輝かせます。それなら、優劣を争っても意味がありません。むしろ、自分らしさ、自分にしかできないことについて考えなければならないのです。

この詩に会ったお陰で、私はやっと○と×の世界を抜けて、たくさんの色で輝く世界の中で自分の居場所を探し始めました。何よりも日本語が好きだったので、学習する能力をすべて日本語の勉強に生かしました。そして、周りの人をライバルと考えずに優しい気持ちで接してみたら、詰まらないと思っていた私の性格でも必要としてくれる、その代わりに自分の力を貸してくれる人が現れました。「みんな違って、みんな良い」を

思い出しながら、私はこの世界とその中の自分をだんだん好きになっていきました。

今は私も詩を書いているのですが、このように誰かにとって支えになれる詩を書きたいな、と心から思います。金子みすずにいただいたこの大事な言葉を心の中で新しい言葉、一番自分らしい言葉に変えて、また次の人に伝えていきたいです。

以上です。ご清聴ありがとうございました。